

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13006

研究課題名（和文）映画演出の美学と政治学：ジャン・ルノワール作品の生成論的研究

研究課題名（英文）Aesthetics and Politics of Filmic Mise-en-scene: Genetic criticism of Jean Renoir's Films

研究代表者

角井 誠 (Sumii, Makoto)

早稲田大学・文学学院・准教授

研究者番号：90803122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、未刊行のアーカイブ資料に基づいて作品の成立過程を辿る「生成研究」の手法を用いて、フランスの映画監督ジャン・ルノワール（1894-1979）の「演出」を分析することで、その作品においていかに芸術的な要素と政治的、社会的要素が絡み合っているかを解明することを試みた。とりわけ、『ランジュ氏の犯罪』（1936）や『ゲームの規則』（1939）などのルノワールの代表作について、生成過程と詳細な映画分析を行うことで、美学や政治などの諸力が複雑に絡み合うさまを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ジャン・ルノワール作品における美学と政治学の絡み合いを具体的な資料、分析に基づいて明らかにしたという点で、フランス映画研究、ルノワール研究の歴史において意義をもつばかりでなく、映画における生成研究、映画演出の分析の方法を洗練、確立する点で広く映画研究においても意義をもつものと言える。加えて、映画の生成、演出の分析は、研究のみならず、実作者や観客にとっても一定の意義をもつものと期待される。

研究成果の概要（英文）：This study has examined the creative process of Jean Renoir's films based on unpublished archival documents to show how artistic, political and social elements are intricately intertwined in his oeuvre. It especially focused on his masterpieces, such as *The Crime of Monsieur Lange* (1936) and *The Rules of the Game* (1939), which were subjected to in-depth analysis and of which creative processes were studied. As a result, it revealed the entangled relationship between aesthetics and politics in Renoir's filmic text.

研究分野：映画研究

キーワード：映画 映画理論 映画演出 作家主義 生成研究 フランス映画 ジャン・ルノワール 映画演技

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景にあるのは、映画においていかに「作家」を位置づけるか、作家の作業、すなわち「演出」について考えるかという問題である。

集団で製作される映画という表現媒体にとって、「作者」という概念は必ずしも自明のものではない。にもかかわらず、1950年代にフランスの映画批評誌『カイエ・デュ・シネマ』で「作家主義」が提唱されて以降、監督を映画の「作者＝作家」とみなす作家研究は映画研究の主要な分野をなしてきたと言える。

作家主義において、ロマン主義的な創造の主体とみなされた作家は、テキスト分析や映画記号学の進展のなかで、テキストの首尾一貫した構造の中に事後的に見出されるものとされ(ピーター・ウォーレン、『映画における記号と意味』、1969年)、文化史的研究のなかで作品の「闘」にある存在として読み直されてきた(Tom Gunning, *The Films of Fritz Lang: Allegories of vision and modernity*, 2000)。近年では、プロダクションや生成の研究の進展のなかで、作品をとりまく様々な諸力と対峙し、折衝する「社会的主体」としてとらえなおされている(木下千花『溝口健二論』2016年)。そこでは、かつての作家主義では、通常の監督と「作家」を分かつ目印とされた「演出」は、映像テキストを生産する社会的な行為として再定義されることとなった。

ジャン・ルノワールは、作家主義によって特権的な作家とみなされた映画監督である。印象派の画家オーギュスト・ルノワールの次男として生まれたルノワールは、無声映画期に映画監督として活動を始め、1930年代には『大なる幻影』(1936)、『ゲームの規則』(1939)などリアリズムを基調とした作品を監督しフランスを代表する監督となった。第二次大戦勃発とともにアメリカに亡命し、1940年代にはハリウッドで映画を制作。戦後は、フランスやイタリアで、『黄金の馬車』(1952)、『フレンチ・カンカン』(1954)など、より人工的な作風の名作を発表した。

ルノワールについての作家研究は膨大な数に上り、その総体は作家研究に対するアプローチの一覧表の様相を呈していると言えよう。

まず作家主義批評において、ルノワールは個性的な「作家」として認知され、奥行きのある画面や長回しによるリアリズム美学や即興演出が論じられた。アンドレ・バザンの古典的著作『ジャン・ルノワール』がその頂点をなすものだといえるだろう(André Bazin, *Jean Renoir*, 1971)。

しかし、80年代になると、作家主義の非歴史性、非政治性が批判され、作品を歴史的コンテクストの中に置き直し、内容はもちろん、形式(奥行きのある画面や長回し)のもつ政治性も議論された(Christopher Faulkner, *The Social Cinema of Jean Renoir*, 1986など)。とはいえ後者の動向も、理論的考察とテキスト分析が主であり、作品の生成が検討されることは稀であった。

その後、90年代になると、アーカイブの整備が進み、オリヴィエ・キュルショラによって一次資料に基づく生成研究が行われるようになる(Olivier Curchod, *Partie de campagne*, 1995など)。生成研究は、ルノワールの作品について多くのことを明らかにしたが、そうした動向を担ったのが主に『カイエ・デュ・シネマ』のライバル誌『ポジティブ』周辺の研究者だったこともあって、『カイエ・デュ・シネマ』の作家主義が作りあげた神話(即興演出の神話など)を否定することに主眼が置かれ、その射程はきわめて限定され、偏向したものとなってしまった感がある。2012年に刊行されたパスカル・メリジョーによる浩瀚なルノワール伝もまた、膨大な資料や調査に基づく労作ではあるが、そうした傾向と無縁ではない(Pascal Mériegeau, *Jean Renoir*, 2012)。

以上のように、ルノワールをめぐる様々な研究がなされてきたが、より広い射程のもとに生成研究の方法を用いつつ、ルノワール作品における美学と政治の絡み合いを問い直す作業が残されていると言える。

2. 研究の目的

本研究は、生成研究の方法を用いつつ、それを映画テキスト分析と組み合わせることで、ルノワール作品における美学と政治の絡み合いを明らかにすることを目的とする。そのさい、作家主義批評のキーワードであった「演出」に着目したい。「演出」を、映画作家個人の美学の問題としてではなく、映画作家の美学、政治や社会、産業の要請といった諸力のあいだでの折衝の作業ととらえなおすことで、ルノワール研究、さらには作家研究に新たな視座を切り拓くことを目的とする。具体的には、ルノワールがそれぞれの作品において様々な諸力と折衝しつつ映画テキストを紡ぎ上げていく様を明らかにすることで、ルノワールの作品を読み直すとともに、映画作家を、美学、政治、文化等の諸力の結節点としてとらえなおしていく。

近年、日本映画については、未刊行資料を用いた研究は目覚ましい成果を収めている(木下千花『溝口健二論』など)。しかし、外国の監督に対する生成論的な研究は、資料へのアクセスの困難さもあっていまだ発展途上にある。外国映画について、生成論的な研究を開拓することもま

た本研究の目的、意義として挙げられるだろう。

加えて、演出は実践的な問題でもあって、研究者のみならず、実作者にも関わる。ルノワールの演出のありようを明らかにすることで、実作者に向けて一定の寄与をなすことも本研究の目的である。

3. 研究の方法

研究を進めるにあたっては、(1)映画テキスト分析、(2)アーカイブ調査(フランス国立図書館(BnF)、映画図書館(BiFi)など)、(3)文献収集と読解の3つを組み合わせることで、総合的な観点からルノワールの演出の問題を考察する。

具体的には、4つのサブテーマを設定し、作業を進めた。

映画における演出の概念の再検討

理論的な作業として、映画における「演出」という概念の検討を行った。そもそも演劇の用語であった演出を、映画に固有な時空間の構築として再定義したのが作家主義批評であった。その後もジャック・オーモンやアラン・ベルガラらによって「演出」概念の再定義がなされ、アーカイブ資料を用いた研究が進むなかで、監督と様々な現実的要素との折衝の場としてとらえなおされてきた。以上の動向を整理しつつ、作家の美学に還元されない、様々な諸力との折衝の場として広い意味で演出をとらえ直すことを試みる。

フランス時代のルノワールと人民戦線の関係の解明

1930年代、ルノワールは長廻しを用いた特徴的スタイルを確立するとともに、人民戦線などの同時代の運動とも深く関わっていった。ゆえに、この時期の作品では、美学と政治、文化とが最も有機的に関連しあっている。生成研究とテキスト分析によって、この時代の特徴的なスタイル、政治的、社会的要素の関連を明らかにすることを試みる。それによって、作家主義批評と80年代のイデオロギー論的ルノワール研究の双方を批判的に乗り越えることを試みる。

アメリカ時代のルノワールと産業、政治の関係の解明

1940年代、ルノワールはアメリカに亡命し、それまでとまったく異なる産業的、文化的コンテキストのなかで映画を作ることになる。アメリカ時代のルノワールの演出については、ハリウッドの産業、政治(プロダクション・コードや戦時下の映画製作の問題)といった諸力との折衝の過程について広い視座から考察を行っていく。

戦後のルノワールの政治性の解明

演劇性を強めるこの時期については、かつては政治や社会から撤退し作家の美的世界へ後退したと論じられもしたが、現在では、作品と同時代の社会との結びつきが指摘されている(Martin O'Shaughnessy, *Jean Renoir*, 2000など)。しかし、それも理論的考察の段階にとどまっている。本研究では、後期作品の製作プロセスを検討し、ルノワールの創造、政治、そして演劇という文化形態の結びつきを具体的に明らかにする。

4. 研究成果

新型ウィルス感染症流行のため、途中、アーカイブ調査を行うことが困難となる時期があったが、フランス国立図書館(BnF)、映画図書館(BiFi)に所蔵されるルノワール関連資料を体系的に調査することができ、作品の分析や文献、資料の読解を進めることができた。

期間内に公表できた成果としては、(a)ジャン・ルノワールの演出に関わる研究成果と、(b)演出概念の再検討(上記サブテーマの)に関わるものに分けられる。

まず、(a)に関しては、主に、上記の)に関わる部分で大きな成果があった。

- ルノワールの代表作である『ゲームの規則』の生成プロセスと映画作品の原理について、「演技の規則 ジャン・ルノワール『ゲームの規則』をめぐって」(日本映像学会 映像テキスト分析研究会、2022年3月30日)で発表を行った。『ゲームの規則』の複雑な生成過程、とりわけキャスティングの過程と脚本の生成過程を明らかにするとともに、それを踏まえて、それぞれのシーンにおける演技、演出を分析することで、作品を貫く規則を明らかにした。
- 同じくルノワールの代表作である『ランジュ氏の犯罪』の生成プロセスと映画作品の原理について、論文「ジャン・ルノワール『ランジュ氏の犯罪』における空間の力学 人民戦線、大衆小説、ジェンダー」(『仏語仏文学研究』、2024年)を執筆した。アンドレ・バザンによる有名な分析を踏まえつつ、生成過程を丹念に辿った上で、空間の演出という観点から映画テキストを詳細に分析することによって、人民戦線、大衆小説、ジェンダーという政治的、文化的諸力が、そこでいかに絡み合っているかを明らかにした。生成を踏まえたうえで、作家主義、政治、社会、文化、ジェンダーなどの多様な要素の関係を検討するこの論文は、本研究の目的を達成する最大の成果であると言える。

(b)については、重要なルノワール論を残した映画批評家アンドレ・バザンの演出論の検討、そうした作業を踏まえた他の映画監督の演出に関する研究が挙げられる。

- ・ 論文「存在の刻印、魂の痕跡 アンドレ・バザンの(反)演技論」(『アンドレ・バザン研究』、2020年)では、バザンの演技論論を検討した。ルノワール論を含むバザンの演技論の概要を明らかにするとともに、その限界を指摘した本論考は、演出概念の問い直しの一貫をなすものであると言える。
- ・ 論考「人間の探究と発見 ゴダールと俳優演出をめぐる覚書」(『ユリイカ』、2022年)では、ルノワールの演出についての研究を下敷きにしつつ、ヌーヴェル・ヴァーグを代表する映画作家であるジャン＝リュック・ゴダールの演出を、美学、政治の観点から考察した。

ルノワールに関して期間内に公表できた成果は必ずしも多くはないが、上記の『ゲームの規則』、『ランジュ氏の犯罪』の分析において、大きな手応えを得ることができた。今後も、本助成での調査結果を踏まえて、積極的に論文執筆、研究発表を行い、単著としてまとめる作業を継続していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 角井誠	4. 巻 55
2. 論文標題 人間の探究と発見 ゴダールと俳優演出をめぐる覚書	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ユリイカ』	6. 最初と最後の頁 271-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角井誠	4. 巻 -
2. 論文標題 生と演技、現実と映画のあわいで 『ホーリー・モーターズ』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『レオス・カラックス：映画を彷徨うひと』（フィルムアート社）	6. 最初と最後の頁 158-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角井誠	4. 巻 -
2. 論文標題 アンドレ・バザン 「不純な映画」の時代の批評家	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 堀潤之・木原圭翔編『映画論の冒険者たち』（東京大学出版会）	6. 最初と最後の頁 74-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アンドレ・バザン（角井誠・翻訳）	4. 巻 6
2. 論文標題 マルセル・カルネ『陽は昇る』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 25-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角井誠	4. 巻 4
2. 論文標題 存在の刻印、魂の痕跡 アンドレ・バザンの(反)演技論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アンドレ・バザン研究	6. 最初と最後の頁 5-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角井誠	4. 巻 58
2. 論文標題 ジャン・ルノワール『ランジュ氏の犯罪』における空間の力学 人民戦線、大衆小説、ジェンダー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 角井誠
2. 発表標題 演技の規則 ジャン・ルノワール『ゲームの規則』をめぐって
3. 学会等名 日本映像学会 映像テキスト分析研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------